



進修同窓会 HP にアクセス

定2回生の修学旅行 3

1952〔昭和27〕年の定時制2回生の修学旅行は、3日目に入り、いよいよ憧れの京都での、寺社や名所などの見学です。今号でも、定時制機関誌『星座3号』(1953年3月発行)「思い出の修学旅行」(4A 源田光也 併中2回・定2回)で、その行程を辿っていきます。

引用文中の【 】は筆者による注記です。

京都見学 9月22日(月)

二十一日、五時半頃目が覚めた……と言うよりは起きた。前に寝ていた者が夜中に頭を蹴とばされたらしいがよく寝られた。一時間で朝食を済ませ、各自弁当を貰って外へ飛び出して待っている。今日も天気は上々だ。いつの間にか清水先生が例の鞆を提げている。約束通り山田駅〔現伊勢市駅〕に届いていたそう。二台のバスに分乗して旅館三山にさようなら。

大仏殿の様な形の【国鉄】奈良駅へそれから奈良線で約一時間程ゆられて、八時半頃、今日の日程である京都に着く。全員元気で異状はない。

そこで我々を待っていたものは、正面の窓に土浦第一高等学校と書いて張つてある素晴らしい最新型の観光バスとこんな人を京美人と言うのだらうかと思はれる様な素敵なバスガールさんだった。……。

土浦第一高等学校の皆さま、遠い処をようこそいらつしやいました。ふつゝから今日一日私が皆様と御一緒にお供して平安京の昔を偲ぶ京都の数多い名所旧蹟の一つくをご案内させて頂きま

す。どうぞ皆様今日の御日程を楽しくお過ごし下さいませ。

とバスガールさんがマイクを片手にまず手始めの挨拶をするのが、後のスピーカーを通して流れてくる。……。

とうくと説明は続く舟を逆さにした様な帽子を斜めに被り、洒落た感じのするバスガールさんだ。奈良でのおやじさんより大分感じがよい。

京都弁を無理に標準語に直した為だらう。変なところで言葉が切れてアクセントが尻上りになる。しかしそれが何とも言えない愛きようを漂わせて調子がよい。……。」

京都での見学は東本願寺からスタートし、三十三間堂から清水寺へ。

「……。遠い処をお疲れ様でした。……清水寺でございます。と正門の前に頑張っている石の唐獅子を指し乍ら

他のお寺さんの唐獅子は皆恐ろしい顔をして怒っておりますが、清水寺の唐獅子だけは大きな口を開いて笑っております。これは皆さんがこゝ迄登って来てへたばつてしぐい顔をしておられる

のでその疲れを吹き飛ばすのだそうでございます。さあ皆さんもこのお獅子さんの様に笑って元氣よくお詣りいたしましょう。

とバスガールが先に立って門をくぐる。誰か『わはゝ……』と大声に笑った。

『このお堂は……』と指さす前を一齐に見上げると堂の縁の上から市村君が写真機を構えていたのでどつと笑いが湧く。

『あの三重の塔は……』と振り仰ぐと急に太陽を真正面に受けて僕が大きなクシャミをする。笑い転げてバスガールも暫くは説明が出来なかった。あちらこちら説明を聞いているがどうも我々の人が一番上手の様な気がする。清水の舞台からは京都の市内が一望の下に見渡せる。下を歩く人が小さい。清水の舞台から飛び降りる様な気持で……とよく言うが成程こゝから飛び降りるには相

清水の舞台から飛び降りる気持を実感した一行は、知恩院、平安神宮、銀閣寺と巡り、午前の予定は終了。

「……。これで午前中の見学は終わった。郊外の嵐山迄二十分程走りつづける。途中バスガールの案内は休みなく京都の歴史等を語り続ける。……。横で見習のバスガールが先輩に合わせて口を動かし乍ら練習している。今の三年生が来る頃はこの人の説明を聞くかも知れない。こんもりとした山が見え幾十台もの観光バスが並んでいる嵐山に着いた。



嵐山にて 左端が黒沢近、左から4番目が源田光也

我先に降りて、記念撮影の後堤のベンチで弁当をばくつく。たくあんや煮干では集団中毒も起るまい。特に頼んだのだと先生が言う。河を渡って来る風が頬に心地よく嵐山の緑にしばしは疲れも忘れる。一時間程の自由行動があつて、僕も百間余りも長さのある渡月橋を渡った。下を大堰川【おおいがわ】が流れてい



この上流は

保津川下ればしづきで濡れる

もたせやりたやひのき笠

と歌に知られた保津川である。

午後一時、全員集合して名残り惜しい嵐山に別れを告げる。『オウライ、く』と調子のよい声がして車が廻る。さっきの見習ガールさんだ。

今日最後の見学地である京都御所を指して車は走る。

途中、見習嬢が代つて説明をするが、盛んにつかえる。やじられてよけいに上がる可哀そうに、さっきの『オウライ』の調子は何処へやら、この辺『太秦』は各社の撮影所が多く後から女優の乗った車がついて来ると言つて皆が騒いでいる。確かに女の人は乗っている。

見習嬢のとぎれくゝの案内とは反対にバスはエンジンの音も軽やかに走り続けて、やがて白い土塀に囲まれた御所に着いた。瓦の一枚くゝにも菊の御紋章がついている。こゝでも所内での写真は一ヶ所を除いて、禁止してある。清涼殿の前で『香炉峰の雪は……』等と博学な連中が話し合っていた。本当に清少納言でも立たして見たい様だ。屋根は十糎程の檜はだ葺きで立派だった。映画『源氏物語』の場面が思い出される。屋根の上の避雷針が何となくしっくりしない感じだった。とにかくいたる所に菊の御紋章が見受けられた。やがて御所をも後にする。……。

バスは市内を一巡した後、三条大橋前の伏見旅館に到着。「さようなら」「さようなら」と、皆は続いて車を降り、去つて行くバスから二人のバスガールさんが手を振つて、別れを惜しんでくれました。

「……『ようおいでやす』と旅館の友達が出迎える。早速二階へ上つて足を投げ出した。目の前の東山三十六峰が静かに横たわっている。土産物売りが来て店を拡げた。『あゝさ、たんとこうとくれやす』八ッ橋や、絵はがき等を買ひ込む。皆んなにわいぐやられて『ほんまにもう無茶苦茶やがな』と嬉しい悲鳴を上げている。女中さんがいそがしそうに、お膳を持つて階段を上つて来ては『おゝしんど』と汗をふく。『京美人はどの辺へ行くと見られますか？』と誰か聞けば『あてかて京美人どつせ』と愛きようをふりまく。

聞く方は舞妓はんのつもりだったらしい。食事もあり、陽もとつぷり暮れて風呂に入るのもどかしく、夜の祇園へと繰り出した。歩いて十分程、賑やかな通りへ出る。やはりパチンコ屋が沢山あつて、盛況を極めていゝ。賑やかさは東京の浅草や銀座ではないが、京都の方が上品な感じがする。ものやはらかな言葉のせいもあるだらう。流れる人の波をよけながら、二三の買物を済ませる。時々友達に行き合ふとそれゝゝ大事そうに包みを抱いている。小堀君と一緒に清水焼屋を探し求め、十時頃帰ろうとすると、さて道があやしくなつた。覚えをたどりながら歩くこと約十数分、どうも心細くなつてお店の売りさんに聞いてみる。なあんだ旅館の二、三軒手前だった。後で店の人が笑つていた。旅館につくと『お帰りやす。』すっかり京都弁を覚え込んだ友達がりんごを囓り乍ら玄関に頑張つていゝ。『明日の朝は早いのだからもうお寝みなさい』と先生の注意があるが、しかし寝ればもう旅行は終つてしまふ

のだ。皆んなは自分の買つて来たものを広げて、盛んにはしゃいでいゝ。向かうの部屋では女生徒が声を張り上げてバスガールの真似をしているのが聞える。旅館でも門を降した様だ。十一時、あきらめて床につく。疲れも手伝つてか、もう軽いゝびきさえ聞える。大分冷えて来たやうだ。……。

思い出を胸に 9月23日(火)祝

二十三日、早く起きて人つこ一人居ない大通りを市電で京都駅へ約三十分、駆足で東京行きの列車(注)に乗り込めば汽車は間もなく思ひ出深い京都を後に、次第に速度を増してゆく。名残り惜しい気もするが早く帰つて見たくなつた。いつもの癖で又少しねむる。

(注)東京行きの列車

京都 0700 発東京 1623 着の急行「雲仙」と思われる。

『随分ぐつすり寝た様ね』と前の席の女生徒が笑う。『どうして』だつてよだれを流していたもの『あわてゝハンケチを取り出す。今日は一日退屈な汽車の旅だが皆んなの中には、話の中でもう一度関西旅行をやり直して、それゝゝの思ひ出に花を咲かせている組もあり、或は合唱している組もあつた。汽車は賑やかな我々を乗せて関西を後に真しぐらに東京へ向かつて走り続ける。

……。乗り降りする客種も大分代つて聴きなれた言葉を耳にする様になつた。汽車は休みなく走り続ける。……。

酔っぱらいの客もべらんめえ口調だ。もう近い。日も暮れる。申分ない旅だった。只残念な事は、舞妓さんと富士山が見られなかつた事だけだ。

灯りもちあらはら、列車は大きく弧を描い

て走る。東京へ……そして土浦へ。家の人が迎えに出ていゝかも知れない。」

源田は、この修学旅行を

「……、土浦一高生として恥じない旅行だつたと思う。コースの選び方も日数が少ないのだから、この位の忙しさは仕方がないだらう。しかしこれで満点であつたとは考へられない。往復の車中で、或は旅館で、人に迷惑をかけた時間を守られなかつたりした事が果してなかつたらうか。人員の点呼も終りの頃はあやしくなつた。浮つはずみにいさゝかはこの様な事もあつたかも知れない。

しかし何よりも今度の旅行で我々の得た収穫は大きかつた。半学生、半社会人としての我々に学生としての喜びを与え、自覚を新たにし、意義を感じしめた。

今迄は一人寂しく味はつていた喜びを、或は悲しみを、皆んなにぶちまけ、そして分ち合つた。かつてこれ程皆んなが溶け合つた事があつたらうか。我々は思う存分に深呼吸し、そして大きくのびをした。

四年間の苦汁の中に味わつたこの楽しい思ひ出は、今後いかなる苦難に直面した場合でも必ずや我々を勇気づけ、それに打ち勝たしてくれる元となるに違いない。僕はこの旅行を八〇点と採点したい。」

と、総括しています。

定2回生の修学旅行は、十分に修学の結果を挙げ、学校側の理解も深まつて、その後は、4泊5日(車中1泊)となつて続けられました。

(高21回 松井泰寿)